発行日　2003年6月20日（隔月20日発行）通巻231号　1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター会報 / トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

Trial&Error

《特集》中東 ― 破壊の現実と再生への模索 ―

プロジェクトの現場から - 南アフリカ・ラオス
そこが聞きたい - 『地方に住む私たちに、何ができますか？』
スタッフのひとりごと - 『今日も旅人は行く』
みるよむきく - 『地雷　なくそう「悪魔の兵器」を』
プロジェクト一覧
国内ひろば

<イラク> 混乱の中で生まれてくる命

JVC Japan International Volunteer Center

No.231
July - August 2003

《特集》中東 ― 破壊の現実と再生への模索 ―

「正義」の名のもとで進められたアフガニスタン、イラクへの一方的攻撃と破壊、パレスチナで今も続く抑圧――。人々の混乱と苦しみはおさまるどころか、日を追って激しくなっているようにも見える。その現実を追いながら、JVCに何ができるのかを考えた。（編集部）

イラク
― 女たちの思いに寄りそって ―

看護師　吉野 都

◆子どもと女性の「静かな戦い」

バクダッドでは、子どもたちやお母さんたちによるもうひとつの「戦い」が静かに始まっていた。お母さんたちは、米英の「攻撃」に脅かされる子どもたちの命を懸命に守ろうとしている。同時に、子どもたちもお母さんたちも「戦争」によって失われた日常生活を必死に取り戻そうとしている。

バクダッド陥落から一週間後の二〇〇三年四月十六日。私たちは、緊急支援のためにイラク入りした。一月に訪問したときの静かなバグダッドとは違って、街は喧騒の渦中にあった。所々、ビルから黒い煙が立ちのぼり、道路には丸焼けになった車両や戦車が放置されていた。いたる所にアメリカ軍の戦車とともにアメリカ兵が駐屯している。戦車の上でアメリカ兵が飲むコカコーラの缶の赤い色が、迷彩色の中でやたらと映えている。そんなアメリカ兵に群がる子どもたち、「イラクはひとつ」とデモを行なっている男性たち、サダム・フセインの像を倒す人々、略奪したものを運ぶ人々とその名の通りの泥棒市。

そんな喧騒からはずれ、戦前からJVCスタッフが訪問していた病院や子どもセンターに足を運ぶ。そこには、子どもたちと女性の、終わることのない静かな「戦い」があった。

ほとんど野戦病院と化した子ども病院に入院していた十三歳のアリ君は、四月十一日に爆発に巻き込まれた。四肢を中心に、体中を負傷している。骨折の手術をやっと行なえても、病院の医療スタッフや医薬品の不足もあり、傷の治療はうまくできないのだろう、菌に感染して化膿している。痛み止めもないので、アリ君はそんな傷の痛みにじっと耐えていた。「この子をごらんなさい。これがアメリカの起こした戦争よ」。夫も受傷したというアリ君の母親の目は、深い悲しみと強い怒りに満ちていた。

◆空爆下でのお産

イラクの女性はしたたかだ、と改めて思う場面にも、たびたび出くわした。赤新月社の母子保健病院の妊婦検診をお手伝いしたときに出会った十七歳の妊娠八ヵ月の妊婦は、「私たちは、戦争に慣れているのよ。空爆くらい大丈夫」と大きなお腹を抱えながら、控えめな笑顔を見せた。バクダッドの郊外では、「戦争直前に自宅分娩で産んだ。イラクの女は強いのよ」と、眠る赤ちゃんを抱きながら、笑い飛ばす女性もいた。

一方で、「イラク攻撃」という事実に妊娠中の身体が否応なしに敏感に反応してしまう場合もある。「妊娠七ヵ月で、バクダットの空爆中に走って逃げた」と言うホルードさんは、四月十七日に激しい腹痛と出血があり、緊急帝王切開を受け、なんとか女の子、ロカイアちゃんを産んだ。二十八週の早産だったため、ロカイアちゃんは保育器

◀サッカーに興じる子どもたち（戦前のバグダッド）

の中で治療を受けている。その小さな体は開眼することもなく、保育器の中で呼吸をするのが精一杯に見える。

同じ病室には、やはり早産で双子の赤ちゃんを産んだ三十歳のお母さん、ファティマさんがいた。双子のうち一人は亡くなってしまったが、残る男の子、フセイン君を必死に看病する。「空爆中は、保育器を抱えてフセイン君を守った」と言うファティマさん。九〇〇グラムで産まれたフセイン君は、現在肺炎にかかってしまい、なかなか体重も増えない。今回の「イラク攻撃」前後に、こういった早産や流産のケースが増えている、と病院の医師は話した。

◆戦争が子どもたちの命を脅かす

腎臓がんを患う五歳のアハマド君は、戦争中に病院が閉鎖されたため、それまで受けていた化学療法を中止せざるを得なかった。四月中旬に病院に戻ってきたが、症状は悪化している、と三十八歳のお母さん、カドメールさんは訴える。

私たちが昨年十一月、続けて翌一月に同じ病院を訪問したときには、多くの白血病の子どもたちが治療を受けていた。経済制裁下で必要な医薬品が不足する中、それでも何とか治療を受け、闘病する子どもたちや、それを支えるお母さんの姿があった。しかし、現在は数人の子どもしかいない。「みんな、自宅に帰ったよ」とスタッフは言う。治療を受けることもできず、その子どもたちは現在どのように過ごしているのだろうか。

九一年の湾岸戦争以降、使用された劣化ウラン弾の影響で、子どもの白血病やがんが増えている。そして、今回の「戦争」は、それに拍車をかけるように、小さな子どもたちの命をも脅かしている。

非戦ポスターの絵を描いてくれた十歳の女の子、スハッドちゃん。彼女の自宅や、お父さんの職場であるバレエ学校も、空爆と略奪にあった。彼女のお母さんは空爆で自身が負傷したうえ、イラク人が学校の本や楽器を破壊し、略奪していくのを目の当たりにしたという。「泣いているのは自宅の家具を失ったからではないの。どうせ、たいした家具なんてなかったのだから。ただ、本まで燃やしてしまうイラク人を見ていて、この国の、この子どもたちの未来を思うと涙が出てきてしまうの」。そう語る口調や顔つきは、母親の顔であった。

略奪はバクダッドのいたる所で起こっており、JVCが戦前・戦後の食糧支援を行なった地域のストリートチルドレンの施設も大きな被害にあった。ここでも、子どもたちは「略奪」という苦い体験を味わわなければならなかった。施設に住む十五歳の女の子は、自画像として大粒の涙を流す女性の絵を描いた。

十年以上続いてきた経済制裁が、保健医療などの社会サービスを脆弱にし、そのうえで「イラク攻撃」をしたら、小さな命たちが簡単に脅かされてしまうことは、すでに予想できていたことだ。さらに今回の「イラク攻撃」は、イラク国内を無政府状態に追い込み、従来保てていた国内の治安を悪化させ、略奪・暴力が横行する壊滅的な状況をつくり出してしまった。アメリカのいう「正義」の代償は、イラク国内の子どもたちやそのお母さんたちの肩に重くのし掛かっている。

◆子ども・女性の視点で支援を

JVCは、一貫してイラク攻撃反対を掲げてきた。また、昨秋から主に子どもの人権や女性の人権をテーマに、イラク国内での緊急支援、同時にヨルダンでのイラク難民支援を行なっている。

今後イラク国内では、子どもが健全に成長する権利や教育を受ける権利を尊重して、ストリートチルドレンの施設や貧困地区の家庭に対する緊急食糧支援や、補講学校、破壊・略奪を受けた子どもセンターの支援などを行なっていく。教会が運営する補講学校では、キリスト教・イスラム教を問わず、子どもたちの情操教育として、絵画などを学ぶ場を提供する予定である。

次世代のイラクを担う、新しい生命を育む妊産婦さんを尊重したいという思いから、特に赤新月社の母子保健病院を戦前から支援し続けている。ひと月に平均九百件のお産があるこの病院は、地域の女性にとって非常に大事な役割を果たしている。しかし、マンスール地区にあるこの病院は、空爆の影響を受け窓ガラスが全壊し、病院を一時期閉鎖していた。

それでも、私たちが訪問中の四月中旬からはスタッフが徐々に戻り始め、病院の掃除が始まっていた。一週間後には、通常分娩、帝王切開手術までなんとかできるように立ち直り、今では再び毎日新しい命が産まれている。

当直のときに空爆があり、負傷したという五十歳の看護師は、「サダム・フセインも嫌だけど、アメリカ軍も困ったものだわ。彼らが私たちの自由とか人権を考えているなんてとても思えない。イラク人はイラクの問題を、今、真剣に受け止めるべきだわ。だってここはイラク人の住むイラクなのだから」と大きなほうきを片手に語った。

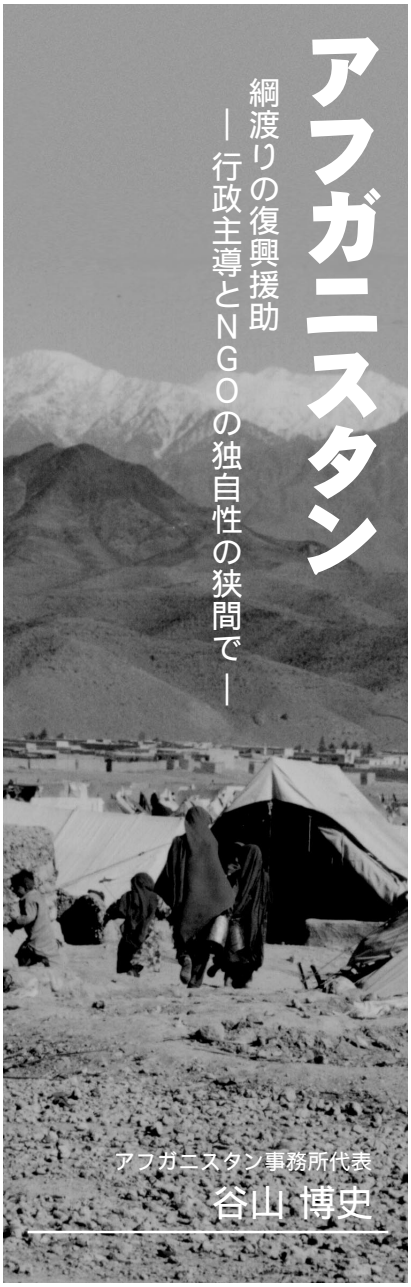
産婦人科医の女医は、「お産で赤ちゃん、無垢な新しい命と出会うたびに、この子どもたちには、私たちが味わってきたようなイラン・イラク戦争、経済制裁、湾岸戦争と今回の戦争、そういったものを決して味わわせたくないといつも思う」と手術室の片隅で語ってくれた。

そんな純粋で素朴なイラクの女性たちの思いに、どう国際社会は答えていくのか。そんな女性たちの思いに寄りそいつつ、「復興」過程にあるイラクを今後も真摯に見つめ、適切な対応をしていく必要性を感じている。JVCは今後も、子どもたちや女性たちの視点に立ちつつ、イラクで人道支援を続けていく。

（よしの みやこ）

アフガニスタン

綱渡りの復興援助
― 行政主導とNGOの独自性の狭間で ―



アフガニスタン事務所代表
谷山 博史

JVCは二〇〇一年秋より、アフガニスタン東部で食糧・医療の緊急救援を行ない、その後無医村地帯での巡回診療を続けてきた。アフガニスタンでは、不充分ながらも行政サービスの仕組みが整いつつあるが、まだ表面だけで、政治と行政の現実は安定には程遠い。復興援助も様々な問題を抱えている。その実情を報告し、JVCが今後アフガニスタンの人々の手による復興をどう支援していくか、障害をどのように乗り越えていくのかを考える。（編集部）

◆行政主導の復興を歓迎する

JVCがこれまで医療活動を行なってきた関係から、アフガニスタン東部地域における保健分野の調整会議に参加してきた。最近、これまで援助調整の主軸であったWHO主催の会議に加えて、保健局主導の調整会議が設けられた。その初会合で議長を務めた保健局長とWHOの東部地域代表は、今後はこの会議が保健・医療分野の援助調整を統括すると宣言した。あるWHOのスタッフは、この宣言を後押しするようにHEWADというNGOの栄養プログラムを例にあげて、これからはWFPから直接食料をもらうのではなく保健局を通すことになると説明した。これは行政主導の復興に向けた明確な意志の表れである。

クリニックの設置は半径十キロ以内で一つに限るという立地方針や、施設のレベルと規模ごとに医療サービスの内容を規定するガイドラインづくりなど、保健行政の政策づくりが進められている。統一したシステムによるサービスが求められる保健・医療分野の活動には不可欠な措置である。NGOも行政のシステム化を尊重し下支えしながら活動する必要がある。

◆カルザイ政権のジレンマ

軍閥が実効支配している地方には影響力が及ばないために「カブール市長」と揶揄されるカルザイ大統領は、政権の権威を演出する大統領令を頻繁に出してきた。最近も地方の知事に対して二つの警告を続けざまに出した。対テロ戦争に積極的でない知事、関税収益を中央に収めない知事は解任するというこれまでにない強い警告である。

財政面で見ると、昨年度の自己財源の歳入が（予算四億六千万ドルに対して八千万ドル減の）三億八千万ドル。公務員の給与が払えないために公務員のデモも頻繁に起こっている。東京復興会議で約束された二〇〇二年度予算期までの十五ヵ月間の援助額二億一千万ドルのうち、達成されたのは一億九千万ドル、そのうちアフガン政府に直接渡された額は六％足らずである。宿舎や外国人スタッフの給与など管理費に膨大な金を費やし現場に金を落とさない援助団体への不満も大きい。こうした事情から今後援助に対して政府の管理が強化されることになるだろう。

◆政府主導の問題点

地方クリニックの人件費をNGOが補填している現状を見ても、政府主体の財政管理、復興計画の策定実施、援助調整は火急の課題だということがわかる。しかし、政府がNGOの活動を統制し、NGOがただそれに従うだけだとしたらどういうことが起こるか。

まず、行政が資金力と政治力を背景にしたNGOの草刈場になる。分野ごとの援助調整会議があるといっても、そこですべての情報が透明になるわけではない。例えばナンガルハル県では、ある大手のNGOが将来の保健サービスを一括して実施するという話し合いが県行政との間でなされている。ゆくゆくナンガルハルで活動する他のNGOはその管轄下に入るか、移転を余儀なくされるであろう。

また、中央・地方を問わず援助団体に様々な通達が発せられる。援助団体職員の給与は新アフガニーで払うべき旨の通達、衛星電話所有者は政府の許可を得るべき旨の通達、現地スタッフのリストを政府に提出すべき旨の通達などなど。しかもそれらが中央政府の決定によるものなのか、知事の権限によるものなのか、さらには県の各局を根城にしている有力者の判断によるものなのかを確認するのは容易ではない。

さらに、中央と地方の行政は一枚岩ではない。地方の軍閥や有力者は各々勝手に施政を敷いているので、ともすると援助自体が中央の方針と齟齬をきたす危険もある。保健局局長主催の第二回保健調整会議では、重要事項の決定の場である調整会議には重要なポジ

ションの人間が出席するように強く求められた。また調整会議のもとに援助調整委員会を設置し、活動地域の振り分けや移転をそこが決定するという。

こうなるとNGOの戸惑いは増すばかりだ。会議の場で重要な案件を即決できる人間がジャララバードにどれだけいるであろうか。ましてや、ヘラートのように知事が絶対的な権限で独自の方針を押し進めようとしているところさえある。ヘラート知事は、ケーブルテレビの放映禁止、女子生徒への男性教師の授業の禁止など、これまでも物議をかもす通達を連発してきた。

◆援助の力学を問う

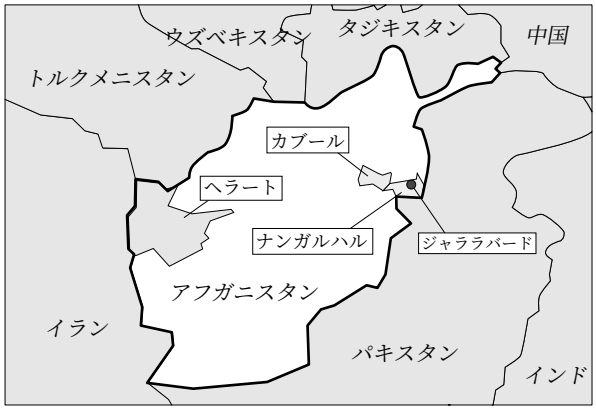
もう一つ私が懸念を抱いている問題は、アフガニスタンでは復興援助という名目で物、金を投入する団体が幅を利かせる風潮にあることである。目に見えるものに金をどれだけ落としたかで成果が問われる。アフガン政府だけではなくNGOにもその傾向が強い。

期間が限られた中で多額の資金を消費するために、多くのNGOは学校建設、クリニック建設、道路建設、用水路や井戸の建設、小麦やトウモロコシ改良種の種子の配布、化学肥料の配布を次から次へとこなしていく。用水路建設一つとっても、地域社会の微妙な水関係・土地関係に慎重な配慮をしている団体が少ないことに驚く。

先日、環境と住民参加を標榜するあるアフガンNGOの地域代表を訪ねてさびしい気持ちになった。アフガニスタンはすべて破壊されてゼロからの出発なのだ、といった口上はアフガン人の誰もがするので受け流すとしても、彼が、用水路の建設を行なうにあたって地元のシューラ（長老会議）を通せば住民参加が保証されていると認識していることにまず驚いた。加えてこの代表は、化学肥料の配布をクレジットで行なったり、新しく設立した農民の組合にパキスタン向けの商品作物の販売とパキスタンでの化学肥料の買い付けを行わせたりして大きな成果をあげていると誇らしげに話した。

▶アフガニスタンの少女

この活動はまだ一年も経っていないという。この手の活動が一年で大きな成果をあげているというのはどこかに大きな落とし穴があるとしか考えられない。



この国ではNGOは農村開発も社会変革も行なってこなかった。二十五年にわたる戦争がそれを許さなかった。同時にこの国は七三年のダウードの革命以来、社会主義的な国家統制に親しんできた面がある。政府の権威主義は政体が変わっても続くであろう。同時に部族主義が縁故主義の淵源（えんげん）になっていて、地方ボスの援助導入合戦や影響力誇示に拍車をかけている。

一方で、この国ではソ連侵攻時代も含めて政府の影響力は表面的なもので、農村地域は部族の結束と相互扶助の仕組みの中で自立性の強い社会を維持してきた。これら四つの要素が変数となってNGOの地域での活動を規定するのである。

◆アフガニスタン社会のマイナスをプラスに

長い戦争での物理的な破壊と人々の精神的な痛手、今も続く治安や政情の不安を考えると、物を中心とした援助も、国際社会がアフガニスタンを見捨ててないことを示す表現であることは否定できない。農村に入ってこつこつと石を積み上げるような形での活動は、今はまだできない。しかし、私はアフガニスタンに希望をもっている。

アフガニスタンの人々は外部の人間の押し付けを最も嫌う。自分たちの文化に誇りを持ち、地域のつながりを大切にする。農村では物事を決めるのに常にシューラの合議で調整を諮（はか）る。また農村は閉鎖社会ではなく、遊牧民との交流や、町や海外に出た地域出身者とのネットワークを通して外に開かれた側面ももつ。これらは表現の仕方ではマイナスの要因になるが、私はこれをプラスの要因として捉えることが開発の出発点だと思っている。

このプラスの要素を見極め、現在の外部導入型の援助に対するオルタナティブを探るためには、私たちがアフガン社会をよく知ることと同時に、人材育成が重要になる。JVCの仲間として開発の考え方と戦略を共有できる現地スタッフがどれだけ育つかによって、現在の復興期の過渡的な援助が、地域主体の開発に移行できるかどうかが決まるといっても過言ではない。

（たにやま ひろし）

パレスチナ

― 封鎖と抑圧が生む貧困と病気 ―

パレスチナ事務所代表 小林 和香子

◆イスラエルの封鎖強化、貧困化するパレスチナ

二〇〇〇年九月のインティファーダ以降、イスラエルによる「封鎖政策」、「道路閉鎖」、「チェックポイント」、「外出禁止令」などが強化され、パレスチナの人々の生活・人権は悪化しつづけている。失業、貧困が進み、栄養失調や疾病が深刻化し、生存までもが危ぶまれる状態になっている。三十ヵ月も過酷な条件の中で抵抗してきた人々も、いまだ和平への期待が持てない中、疲れ果て絶望感を募らせている。

現在のパレスチナ自治区には約三百万人のパレスチナ人が住み、その中の約半分が国連に難民登録されている。また、約百万人の同胞がイスラエル領土内（エルサレムを含む）に住んでいる。自治区の広さは約六千百平方キロメートルで、イスラエルと自治区を合わせた広さの約二二％にあたる。その中で、パレスチナ暫定自治政府が自治を行なえる領土はガザの六〇％と西岸の三七％。パレスチナ人が実際に自治できる地域はわずかしかない。

この地域ですらも、イスラエル防衛軍の管理下に置かれている。オスロ合意で禁止されたはずの新規入植地の建設も急ピッチで進められ、今では西岸の約半分の面積がイスラエル人の入植地になっている。

これらの入植地に住むイスラエル人の「安全」確保のために、バイパス道路が網の目のように張り巡らされている。このため、パレスチナ人のイスラエルへの移動はもちろんのこと、パレスチナ自治区内の移動も、このバイパスによって阻まれ、いたるところに設けられたチェックポイントで、イスラエル防衛軍による検問を受けることになる。

本来数十分の距離が、道路の閉鎖やチェックポイントでの待ち時間、また、チェックポイントを避けるため裏道を通るので、二～三時間かかることも珍しくない。長い待ち時間のため、商品の納期が間に合わなかったり、食品が腐敗して商品価値がなくなることもある。加えて、チェックポイントで受ける嫌がらせや暴力は屈辱的で、パレスチナ人の自尊心を深く傷つけている。

道路だけでなく、空路・水路も封鎖・管理され、パレスチナの人・物の移動は極端に制限されている。水や電気・ガスなどの資源もイスラエルによって管理・制限されている。ＪＶＣが支援しているベイトジブリン難民キャンプでも週に二回しか水が出ない。

パレスチナの多くの町や村では頻繁（ひんぱん）に外出禁止令が引かれ、農地に出られない、収穫ができない、学校に行けない、仕事に行けない、食糧や薬が買えない、など人々の日常生活を困難なものにしている。

さらに、イスラエル防衛軍による「テロリスト撲滅作戦」という名目の攻撃で、テロリストと関係する疑いのあるとされる人物や家族、建築物、工場、オリーブ畑などが攻撃・破壊されている。人々の命や暮らしだけでなく、パレスチナの産業構造もまた確実に破壊されてきているのである。

◆失業・貧困の増加、栄養失調

パレスチナの産業が破壊され続ける中で、パレスチナ人の失業率は三五・六％（西岸三一・〇％、ガザ四六・五％）と確実に高くなっている（パレスチナ統計局、〇二年七月―九月）。大学生の多くは、卒業しても就職できない現実に絶望感を募らせている。

高い失業率に伴い、貧困率※注一も高く、ガザでは八五％、西岸でも五八％となっている（同、〇二年二月）。これらの家庭は、貯金を使い果たし、家財を売り払い、借金を抱えて、多くはイスラム組織、ハマスなどの支援によって生活がかろうじて支えられている。

貧困と道路閉鎖などからくる食品の不足により、人々は十分な栄養が取れなくなっている。なかでも子どもの栄養失調が蔓延しており、特にガザで深刻である。五歳未満の子どもで急性栄養失調が一三・三％。慢性栄養失調が一七・五％とされている。女性の栄養失調も問題となっており、半数近くが貧血症とされている。

また、度重なるイスラエルの攻撃による子どもの精神障害（集中できない、ＰＴＳＤなど）が増えており、特にガザでは五〇％の子どもが何らかの精神的障害を持つとされている。

◆救急車まで攻撃される

イスラエルの封鎖政策、道路封鎖、外出禁止令などにより、病院にたどり着けない病人や妊婦がたくさんいる。重病患者や負傷者を運ぶための救急車も、チェックポイントで通行を拒否されたり攻撃されたりしている。

二〇〇〇年九月末から〇二年十一月までの間に、十五人の医療従事者が殺害され、二百五十人が負傷した。パレスチナ赤新月社でも二十五台の救急車が破壊され、四百三十件以上の通行拒否を受け、七十一人の患者がそのために死亡している。病院へ行くことができない患者のために巡回診療を行なっているパレスチナの医療団体UPMRCも、今年になって五つのクリニックやセンターを荒らされ、医師やスタッフが逮捕されるなどの被害を受けた。

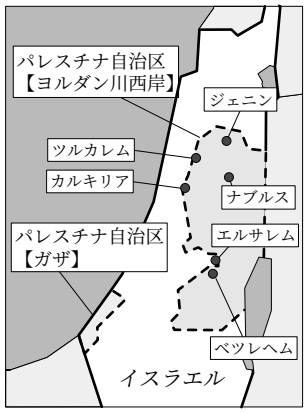
パレスチナの、特にガザの危機的状況に世界中の人道NGOが支援をしている。しかし、五月十二日からは、これらの人道NGOのガザへの出入りが完全に拒否された。国連、NGOのネットワークは、イスラエルに対し抗議しているが、まだ改善の兆候は見られない。

◆今後の見通し

残念ながら、パレスチナの人々の生活環境が近い将来改善される見通しはない。和平への決定的な要因の一つである、パレスチナ自治区のイスラエル人の入植地の建設中止及び撤退の兆しはないどころか、さらに急ピッチで進められ、パレスチナ人の不満を募らせている。

加えて、「アパルトヘイトウォール」（イスラエルでは「防衛フェンス」）※注二の建設である。幅三十～百メートル、高さ平均八メートルでの巨大な壁で、電気フェンス、塹壕（ざんごう）、監視カメラ、センサーなどで構成されるこの壁は、現在北部のカルキリア、ツルカレム、ジェニンの全域及びエルサレム、ベツレヘムの一部で建設中だ。この壁が完成すると、人、動物、物資のすべての移動が完全にコントロールされ、パレスチナ人の生活がさらに脅かされることになる。

ロードマップ※注三の行方も危ぶまれている。ロードマップの過程はカルテット（国連、EU、米、ロシア）によって監視されることになっているが、パレスチナ暫定自治政府がこれを受け入れたのに対して、イスラエル政府はこのカルテットによる監視や難民の帰還権についても断固として拒否しており、まだ受け入れていない（〇三年五月中旬現在）。米国、イスラエル、パレスチナ内にもそれぞれ反対勢力がおり、厳しい道のりが控えている。



※注一　一人一日二ドル以下で生活する人の割合
※注二　パレスチナ人の居住地を囲い込む壁。グリーンライン（四八年停戦ライン）から大幅に内側に食い込んでいることが問題となっている。
※注三　カルテットによって作成された、〇五年までにパレスチナ国家を樹立するための行程表。三つの段階に分かれている。

◆JVCのミルクプロジェクト、地域産業の保護、雇用も。

JVCの活動の基本理念は、地元の人々が自分たちの生活環境を良くしようとする努力を支えることである。しかし現在のパレスチナの危機的状況のもとでは、JVCの活動もその前段階の緊急支援が中心にならざるをえない。しかし緊急支援の中でも、与えるだけで終わらない、地元の人が自らの環境を改善しようとする意志をサポートするよう努めている。

今年の春から米国のNGO、ANERAと共同でスタートした「ミルクプロジェクト」は、栄養失調が懸念されるガザで、幼稚園児に毎日牛乳を飲んでもらうプロジェクトだが、同時に封鎖政策で生産・輸送が難しくなり、危機にさらされていたナブルスの牛乳工場から商品を購入し輸送を受け持つことで、地域の酪農産業を保護することにも繋がっている。さらには、ガザの工場で栄養強化ビスケットの生産も検討中である。これがうまくいけば、ガザの雇用確保にも繋がる。

また、今年の春までは、UPMRCの西岸での巡回医療を支援してきた。封鎖政策や道路封鎖で病院に行けない人たちに対して、医師や看護師が必要な機材一式を車に積んで、村などで簡易クリニックをつくって診察するシステムである。病院に通えない妊婦へのケアを中心に行なってきた。世界一の出産率を誇るパレスチナで、妊婦が安心して子どもを生み育てられる環境をサポートすることは、非常に重要だ。

難民キャンプは家も狭く、生活も貧しく、遊ぶ場所もなく、また人々は日常的に兵士や戦車やジープに囲まれ、脅かされて生活している。紛争地だからこそ、子どもたちが子どもらしくいられる場所と環境が必要とされており、JVCの支援でベツレヘムのベイトジブリン難民キャンプにある子どものための平和図書館の改築が完了した。

図書館ではこれまで、JVCが中心となって音楽教室や平和ワークショップなどを行なってきた。今では、図書館の世話役たちがリーダーシップを発揮するようになり、自分たちでプログラムを考え、実施できるようになっている。今年の夏はこの難民キャンプで初めてのサマーキャンプをしようと、現在アイデアを出しながら一緒に計画を練っているところだ。子どもたちに楽しい夏の思い出が提供できるよう、ぜひ実現させたいと思っている。

（こばやし わかこ）

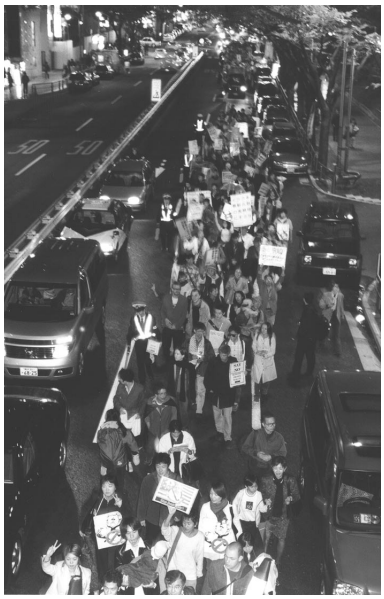
復興支援は紛争の後始末か

事務局長　清水 俊弘

◆対テロ攻撃は「正義」か

「九・一一」以降、世界は「テロ」と呼ばれる「見えない敵」を相手に脅え、警戒する空気に包まれている。この空気をたくみに操作し、「対テロ戦争」の名のもとに自国の覇権を拡大している国、アメリカ。まさに、平和を脅かす不安から人々を解放することを「正義」と位置づけ、先制攻撃すら正当化する新しい「思考」が定着しつつある。

アフガニスタン・タリバン政権への「報復攻撃」、そして大量破壊兵器保有疑惑のあるイラクへの侵攻と、戦意のない相手に対する一方的な攻撃が続いた。世界各地で戦争反対を唱える市民の行動も大規模に展開されたが、同時に「でも、核兵器や化学兵器がテロ組織の手に渡ったら?」と、不安を払拭しきれず、攻撃を否定できない人々も少なくなかった。不安という見えない敵に立ち向かうには、実体ある事実の認識が必要だ。



◀戦争を止めようと多くの市民が参加したピースウォーク（東京）

◆紛争の尻拭いで終わらせない

カンボジア、ラオス、ベトナムから逃れてきた難民の緊急支援をきっかけに始まったJVCの活動の歴史は、まさに紛争の尻拭いの歴史でもあった。と同時に、私たちは単なる後始末をしているのではないはずだ、と自問する日々でもあった。問題解決の方策を「戦争」という手段にゆだねないような意思表示や行動が大事なのは言うまでもない。だが、力及ばず、実際に戦争が起こってしまった場合、私たちはどうすればいいのか。当然、破壊した当事者が責任を取るべきであり、私たちが手を出すことではないという考えもあるだろう。

しかし、ここで、犠牲になった人の立場に立つと、どうか。もし、壊されたのが単純に再生可能な「物」ならば話は簡単だが、現実に被害に遭っているのは生身の人間である。そして、人間が暮らす場が破壊されることで、その地の人間関係や社会のシステム、習慣にまで影響は及ぶ。安定した生活環境の再建は一刻も早く取り組まなければならない緊急の課題だ。

戦争の理由は何であれ、実際に死傷者を出し、生活の場を破壊されたアフガニスタンやイラクの人々に、まず緊急段階において支援の手を差し伸べることは必要だ。しかし、その先に私たちがすべきことは、漫然と支援活動に没頭することではなく、二度と彼らの生活が脅かされることのないよう、社会に働きかけることだ。私たちがその「現場」にいることが、単なる尻拭いで終わるのか、それともそのどてっぱらに入り込み膿を出すことができるのか。NGOとしての姿勢、力量が問われてくる。

◆現場に入り、市民の視点で

紛争直後の「復興」段階では、様々な問題が起こる。新聞には、戦後復興に向けての国際協力として、多額の資金が投入される話が紙面を飾り、いかにも順調な復興事業の展開を期待させる記事が多い。

だが、実際の現場では多くの混乱が生じている。例えば、アフガニスタンでは、一昨年東京で開催された「復興会議」において、「カルザイ政権の正当性を高めるため」として、多額の復興資金が約束された。しかし、依然として米軍による「対テロ掃討作戦」は続いており、さらに軍閥間の抗争が絶えない地方では治安が不安定なために、復興事業が進められない状況にある。そのため巨額の資金は首都カブール周辺に集中し、地方との格差拡大を助長し、治安の悪化に拍車をかけている。

そして今、アメリカの占領統治下におかれているイラクでも、石油などの利権抗争、周辺国との関係など、アフガニスタンと同様の構図が懸念される。外部からの力で政権が変わり、当事国の安定よりも、「占領国」の利益や関係諸国への配慮を優先する「復興」プロセスをたどる限り、このような「占領国主導の紛争後の状況」が、新たな紛争の火種となる傾向は今後ますます強まるだろう。

その過程を傍観するのではなく、渦中に入ることで、JVC自身も当事者感覚を持ち、実際に影響を受ける一般市民の視点に立った支援活動の展開が可能となり、「次」の紛争の芽を早めに摘み取る努力が可能になる。一日も早く、人々が安心して暮らせる環境を取り戻すために。

（しみず としひろ）

プロジェクトの現場から

南アフリカ
HIV／エイズ感染者支援の「赤いリボン・バッジ」

津山 直子

「赤いリボン」の意味を知っていますか？これは、HIV／エイズ感染者支援のシンボルとして、世界的に使われているものです。

南アフリカ（以下「南ア」）では感染者が五百万人と世界で一番多く、毎日六百人もの人が亡くなっています。アパルトヘイト廃止後の新しい国づくりを進めている南アで、最も深刻な問題であり、ネルソン・マンデラ氏も「現状を知るだけでなく、一人一人が行動を起こそう！」と強く呼びかけています。

南アでは、ビーズ工芸が伝統工芸で、アクセサリーや民族衣装に使われています。そのビーズ工芸で、感染者の女性たちが赤いリボンのバッジやネックレスをつくっています。その女性グループの一つが、イググレツ（ズール語で「誇り」という意味）・サポートグループ。

ジョハネスバーグ市北部のテンビサ地区で感染者が互いにサポートしあう目的でつくられ、三十人のメンバーがバッジづくりの他に、重症患者への訪問看護、エイズへの理解を広げるための学校やコミュニティでの啓蒙活動、エイズ孤児（親をエイズで失った子ども）への支援などを行なっています。

グループの設立メンバーの一人であるググ・ドラミニさん（二十三歳）は十四歳の時にレイプされ、銃で撃たれ重症を負うと同時に妊娠、さらにHIVに感染、赤ちゃんも母子感染で生まれるという何重もの苦しみを乗り越え、シングルマザーとして娘のルンギレちゃん（現在八歳）を育てています。そして、感染を理由に差別され、孤立しがちな仲間たちのネットワークをつくってきました。

病気のために定職に就けない人々にとって、赤いリボンのバッジづくりは貴重な収入源であり、食料や薬を買い、また重症患者やエイズ孤児をサポートするお金になっています。JVCは日本でこのバッジを販売しています。バッジを通し、彼女たちのメッセージを伝え、支援の輪を広げていきたいと思います。

▲赤いリボン・バッジ。1つ400円で販売中！
購入申し込みは南ア担当・原田まで。
Tel: 03-3834-2388　E-mail: kyoko_h@jca.apc.org

ラオス
複合農業のノウハウを実践者に学ぶ

中村 咲野（さくや）

五月末、カムアン県下の三村で自然農業研修を行なった。研修は二日間で、村の農業事情を聞くことから始め、複合農業とは何か、発酵肥料の紹介、そのつくり方の実習、農薬の害、苗の増やし方の実習など多岐にわたった。

村人全員が対象であるが、集会となるとどうしても男性中心になりがちなラオス。しかし、畑は女性がつくっていることも多く、身近な話題でもあるはず。半数くらいは女性であってほしい。「午後は女性も呼んで来て」と言ってみるもののやはり少ない。それでも、その後は乳飲み子をあやしながらノートをとる若いお母さんの姿も見られた。

今回は、ゲストとして発酵肥料を使っている農民を招き、実践談や発酵肥料のつくり方を教わった。農民が直接説明するとやはり信用度が高いらしく熱心に聞いている。夕食の終わった後もそのコツを聴きだす農民の姿が見られた。

ここカムアンでも、この二～三年で化学肥料が入ってきており、余裕のある人は既に使い始めている。しかし化学肥料を使うことで、例えば、収量がいいのは一年目だけで土が固くなってしまう、肥料の使う量が年々増える、などの問題が現われてきている。その中で顕著なのは虫の害。乾季作である村で農薬が使われて虫が発生すれば、農薬を使っていない隣村にもその虫が飛んでいって被害を与えるそうだ。生態系のバランスが崩れている様子がうかがえる。収量が三〇～四〇％減少している例もあるようだ。

化学肥料を使って一時的にでも収量を拡大したいという思いと、現に発生している虫害をなんとか解決したいという思いにさいなまれている時に行なわれた今回の研修は、農民にどのような形で届いただろうか。自然農業にはまだ半信半疑の農民もいるかもしれないが、その中で一人でも二人でも複合農業を実践する人が現われてほしい。それには、私たちも村へ通い、逐一状況を見ていく粘り強さが必要だ。農民、JVC双方の協働活動の始まりのときである。

地方に住む私たちに、何ができますか？

各地域にお住まいの会員の皆様から、「地元で何かできることはないか」と、お問い合わせをいただくことがよくあります。

ＪＶＣの事務所がある東京近郊にお住まいの会員の皆様には、報告会や講座にご参加いただいたり、ボランティアとして活動していただくことで、実際につながりが持てますが、各地域にお住まいの皆様には、会ってお話しする機会もほとんど持てないのが残念なところです。

会員の方々こそが、このＪＶＣの組織をつくり上げている礎（いしずえ）。皆様との関係を、「ＪＶＣの活動を資金的に支えていただき、現地の情報をこの機関誌でお届けする」だけで終わらせたくはありません。ともに新しい生き方や社会を求めていきたいと思っています。

一、地域でのイベントにＪＶＣが参加する際には、ぜひご参加ください

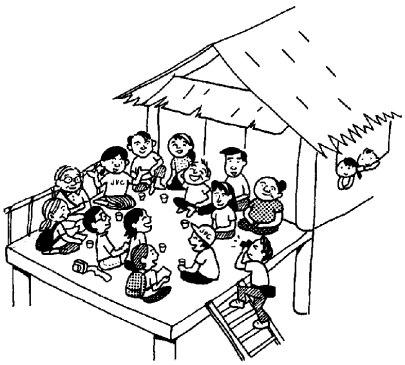
いつ、どこで、何のイベントで、だれが講演するか、この機関誌やホームページでできるだけお知らせしますので、その機会にはぜひご参加ください。

二、あなたの地域で（小さな）活動報告会を企画してください

できる限りスタッフがうかがいます。現地の状況や、活動の詳細・課題を共有しましょう。

三、ＪＶＣのパンフレット、活動パネルを貸し出しています

パンフレットは無料です。地域のバザーやイベントで、ＪＶＣのパネルを展示し、活動を広く紹介してください。



四、スタディーツアーに参加しませんか

春・夏休みの時期に、タイをはじめ、いくつかのスタディーツアーを行なっています。期間は七～十日間程度です。

五、ご意見をください

Ｔ＆Ｅを読んで、ホームページを見て、あるいは新聞に掲載されたＪＶＣの記事を読んで…、どんなことでもけっこうです。ご意見をお聞かせください。会員の皆様との意見交換、情報交換はとても大事です。

六、ともに歩みましょう

署名活動、提言・シンポジウム、地域での環境問題・平和問題など、ともに一市民として考え、活動していきましょう。海外に行って活動するだけが「国際協力」ではありません。国内にいて、環境・平和・貧困の構造を考え、声をあげていくことはそれ以上に重要なことなのではないでしょうか。

＊答えた人：広報担当　荻野 洋子

スタッフのひとりごと

今日も旅人は行く

タイ・コンケン事務所　マヌーン・ムンチュー

ある旅人の人生。

空想　往来　ときには疾走。
いまの時代に隠されているなにかを求めて。
きっとなにかが見つかる　なにかを得られると　流れるままに
生きていく。

地の人にとって行事のない時期はある。
魂に委ねる旅人にだって旅人としての休みがあってもいいのでは。
旅人から地の人へ。
夢を求めた人生　理想だけの人生は自分を浮遊させていたんだ。
社会の中に自分の居場所がないことに気づき　そこに参加せよと
急がせた。

そんなとき　ある農村地域の調査に参加した。
いくつかの村の境界にある小さな森を歩き　その村のひとつが
ＪＶＣの活動地だった。
短い期間に日本の若者や世界各国の仲間たちとの邂逅。
そして旅人はＪＶＣの仲間になっていた。

しかし…　常にリュックを片手に　むらやまち　多くの地域を歩く
ことは変わらない。
そして今日は村人たちと酒を飲む。
哀愁の日が続く…。

旅人には旅人としての
休みはない。

（訳　松尾 康範）

イラスト／かじの 倫子

みる よむ きく

『アジア・アフリカは貧しい。戦争している国が多い。エイズでたくさん人が死んでしまう国もある…。』修学旅行の一環としてＪＶＣを訪れる中学生たちは、その多くがアジア・アフリカを貧しいととらえているようだ。そしてその国々についての知識はどれも漠然としたもので、貧困・紛争の原因や解決への課題、いわんや自分とのつながりを考えるところまでは至らない。

「総合的な学習の時間」が話題になっている昨今、小学校での国際理解学習、時事問題の学習に向けて、「二十一世紀の平和を考えるシリーズ」が企画された。その三冊目、『地雷　なくそう「悪魔の兵器」を』が発行になった。文は、地雷廃絶日本キャンペーンの運営委員も兼ねているＪＶＣの清水俊弘が書いている。

絵や写真がいっぱいの一冊は、見開きごとに一つのテーマになっている。

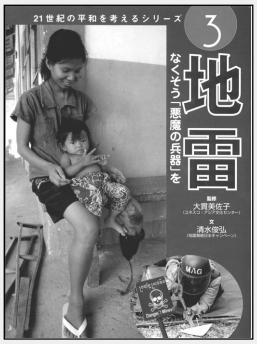
・どうして、地雷は埋められているの？
・なぜ、地雷を悪魔の兵器というの？
・地雷の犠牲者がでると、家族の生活はどうなるの？
・地雷はどのようにとりのぞくの？

武器というもの自体が身近に存在しない日本に住む私たちにとって、地雷にまつわる問題は、想像しにくいものだ。そこを「学校の校庭のすぐ脇に地雷が埋まっていたら…」「コンビニに行くまでの道で地雷を踏んでしまったら…」と、自分の暮らしに置き換えて考えると、少しは身近に感じられるかもしれない。

この本は、地雷の問題をわかりやすく説明してあるだけでなく、そこに生きる普通の人々の暮らしぶりについても紹介している。こうした身近なことを知ることは、地雷の問題に対して私たちに何ができるのかを考える一歩にもなるだろう。

高校一年の息子にでも読ませようかと思って手にしたが、いやいや、まずは自分が読まなくては、という気になった。わかっているようで知らないことが多い地雷の問題。大人にも十分読みごたえのある一冊だ。

（広報担当　荻野 洋子）



『地雷　なくそう「悪魔の兵器」を』

監修：大貫 美佐子
文：清水 俊弘
ポプラ社刊　2800円＋税

《開発協力》

タイ Thailand

地場の市場づくり

コンケン県ポン町における村人による直売市場がスタートして半年が過ぎた。完全有機農業に取り組み一年以上経過している農家を「A」とし、有機農業一年未満、あるいは農薬は無使用だが化学肥料を多少使っていて、三ヵ月から六ヵ月以内に化学肥料を使用しないようにする予定の人を「B」とすることが、この市場の運営委員会で決定された。五月から、生産者「A」は緑の服、「B」は黄色の服を着用すると同時に、生産者は消費者にこの市場の意味を伝えた。（松尾）

北タイ調査

昨年六月から始まった北タイでの調査は、ビルマと国境を接するファーン川流域の三村を主たる対象にした、活動計画の立案に入っている。現在はホイポンという少数民族の村で、住民の水を中心とした環境保全活動にも協力。この村のあるファーン川源流地域の立体模型地図作成を技術面から支援しながら、活動の方向性を具体的に検討している。（木村）

農村で学ぶインターンシップ

タイのＮＧＯが活動する農村に一年間派遣され、開発のあり方を学ぶ本プロジェクトは、これまでに七期生までを受け入れた。今年五月には、六期生のタイでの最終報告会に七期生も招き、交流会を行なった。様々な経験や考えを発表し、話し合い、タイ滞在を半年残す七期生にとってよい刺激となったようだ。六期生はその後帰国し、東京で帰国報告会を開催した。八期生は五月十九日に来タイする。（森本）

カンボジア Cambodia

持続的農業と農村開発（ＳＡＲＤ）

カンダール州で十年近く続く、生活改善活動。雨季になり雨が降り始め、活動地の農民は稲作の準備を始めた。乾季に進められていた井戸掘り事業も地下水位が上がるためいったん停止し、七月ごろの小乾季に再開する。新たなコメ銀行設立が始まったプレイソムラオン村では、村人の間でこの活動への意欲が高まっている。（余部）

資料・情報センター（ＴＲＣ）

環境と持続的農業に関する資料を集めた図書館。昨年度は順調に利用者が伸びた。四月初旬に多くのＮＧＯが参加するＮＧＯフェアにも出展し、今後さらなる利用者拡大に向けてアイデアを出し合っている。（余部）

技術学校

プノンペン校・付属自動車整備工場の十七周年およびＪＶＣのカンボジア内の活動開始二十周年の記念式典を五月九日に開き、記念碑を建てた。これは、同校が現住所から移転されずに末長く工場収益で学校運営を続けていけるよう、カンボジア政府から確約をとるための布石の一つである。公共事業運輸省は、プノンペン校職員の一部が公務員であり、同校が同省の管轄であることを再確認した。

シアヌークビル校・工場は、二〇〇三年からシアヌークビル公共事業運輸局長が経営に参画することになり、改善策がとられ始めた。（米倉）

調査研究・政策提言

トンレサップ湖周縁の人々が漁業共同体をつくって漁場を持続的に管理していけるよう、コンポンチュナンの漁業共同体・漁業局・ＮＧＯを連れて、バッタンバンの共同体を視察した。土地問題の調査は、既存資料の読み込みや主な関連機関からの聞き取り調査を終えた。ラタナキリの森林の違法伐採の現場を視察、ＮＧＯや先住民から情報収集した。（米倉）

ラオス Laos

自然農業と農村開発（ビエンチャン）

プロジェクトでは、果樹栽培による食生活の向上、余剰分の販売を視野に入れ、村人自身が接ぎ木や取り木の技術を身につけ、果樹苗を育てていく支援を行なっている。

果樹苗に関しての経験交流ワークショップを四月下旬に行なった。今回の経験交流では、これまでに自らが育てた苗木の交換も行ない、楽しい内容のものとなった。（小川）

森林保全と自然農業（カムアン）

森林保全…タイで行なわれた植林についてのワークショップに参加し、当地の植林事情を話すとともに、他国のＮＧＯと交流した。

農業分野…四月下旬に南部へのスタディーツアーを行なった。恵まれた土壌や気候条件によるコーヒー、多種多様の野菜や果樹栽培などを見学した。当地にとってはたい肥づくりや栽培に関する技術などが参考になった。参加した村人はもらった種や苗木をさっそく自分の農地で試めそうとしている。（中村）

ベトナム Viet Nam

ハノイ事務所

世界銀行をはじめとするＯＤＡ諸機関は、ベトナム政府の開発計画実施能力を信頼し、途上国への支援計画をまずベトナムでパイロット的に実施するケースが目立つ。日本政府も例外ではなく、外務省は「対ベトナム国別援助計画」を国民参加型で改訂しようという試みを進めている。その一環として、ベトナムに滞在する日本のＮＧＯ関係者が草案について意見を述べる場が設けられた。歓迎すべきプロセスであり、積極的に参加することを心がけているが、経済発展や国益の点においての議論を深めるのは至難である。（西）

自然資源管理（ソンラ）

ベトナムで最も森林の少ない地域の一つであるソンラ省で一九九九年に始まったこの活動は、集落を取り巻く自然資源の持続可能な管理・利用を目的としている。その一環として集落共有林づくりがあるが、四月下旬、それに必要な苗木を生産する種苗場の設営をコマ村の対象三集落で行なった。トゥアンチャウ郡スタッフの技術指導の下、総勢九十五名の村人が二万四千のビニールポットに種を蒔き、来年の植林用として育てていく。（田村）

農村開発（ホアビン）

一九九九年から首都ハノイの南西約百十キロに位置するホアビン省タンラック郡内のムオン族という少数民族が住む村で住民参加型農村開発プロジェクトを実施してきた。今年度から活動が始まったバックスン村でも村づくり委員会が設立され、四月には中部ハティン省にスタディーツアーに行った。（伊能）

南アフリカ South Africa

農村開発

自然農業プロジェクトを実施している東ケープ州のカラ地区。年間降水量が五百ミリ以下しかなく、雨水を有効に利用することが農業実践に不可欠である。たい肥サークル（イラスト参照）や等高線上に掘る溝は、雨水保水に有効な方法である。それらを研修参加者から他の農民に伝授するのに役立つように、コサ語と絵で説明するポスターを作成した。（津山）

イラスト／小野 篤子

子どもの教育支援

ジョハネスバーグ市郊外の貧困地区で地域住民が運営するテボホ障害児ホームとインクルレコ小・中学校の運営や研修を支援している。民主後の南アでは、それまでの人種別の教育システムとは異なる、人種融合の新しいカリキュラムと教科書が二〇〇五年完成を目標に段階的につくられている。インクルレコ小・中学校でも教員を対象に、新しいカリキュラムに関する研修を行なっている。（津山）

《緊急対応》

イラク・ヨルダン Iraq・Jordan

緊急支援

四月十六日、佐藤と吉野がイラク入りし、貧困地区に立ち上げた臨時クリニックへの医薬品支援とストリートチルドレンなどへの食糧支援を行なうとともに状況を調査した。空爆よりも戦後の混乱による略奪の被害が深刻で、病院や学校、警察も機能していない。戦前からＪＶＣと関係のあった子どもの文化関連施設も、略奪され、荒らされていた。医療支援は今後さらなる調査を行ないニーズを探ることとし、ＪＶＣの関係している文化関連の施設が一日も早く再開されるように、屋根やガラス窓の修復を行なうことで合意した。（佐藤）

絵画交流

日本の子どもたちが描いた自画像と平和へのメッセージは、当初の目標の千を大きく上回り二千二百枚集まった。ヨルダンの現地ＮＧＯ「カリタス」の診療所に一部の絵を展示し、故郷の家族の安否を気遣うイラク難民たちを励ました。（佐藤）

ヨルダンでのイラク難民支援

終戦を迎えたもののイラク国内は以前として混乱しているために、ヨルダンのイラク難民は帰還ができない。ＪＶＣはカリタスと合同で、イラク難民の妊産婦支援を開始。将来のイラクのために丈夫な赤ちゃんを産んでもらおうと、お産にかかる費用の一部を負担する。四月からすでに三名のお産を支援した。（佐藤）

パレスチナ Palestine

子どもたちの栄養補給（ガザ）

失業率が四六％とも言われ、貧困と栄養失調が深刻化しているガザ地区で、特に栄養失調の影響を受けやすい幼稚園児に一日一パック牛乳を届けている。このプロジェクトはナブルスの乳業工場から牛乳を購入するため、地域の地場産業の保護にも役立っている。秋からの新学期にはガザで栄養強化ビスケットの製造及び配布も行なえるよう現在計画中。（小林）

難民キャンプ平和図書館（ベツレヘム）

ベツレヘムのベイトジブリン難民キャンプ平和図書館（ハンダラ文化センター）では、ＪＶＣがサポートしてきた改築工事が終了し、五月十四日に再開を祝うオープニングセレモニーがあった。パレスチナ暫定自治政府の内務省の方々などが参加し、厳かにテープカットが行なわれた。新しくなったセンターは多目的ルーム、図書館、事務所にトイレとミニキッチンつき。早くも放課後には子どもたちで賑わっている。今後は各種文化プログラムも充実させていく予定。（小林）

アフガニスタン Afghanistan

昨年度で終了した巡回診療活動の経験を生かし、当面地域医療分野で活動する。そのための調査を五月まで実施し、活動地域の絞り込みや活動計画を策定し、六月以降はアフガン社会の仕組みと村人の潜在的ニーズや人間関係の理解を深めながら、地域でのより長期的な活動の可能性を探っていく。また、保健省の女性医療従事者養成コースの具体的な支援活動へ向けた準備を進めている。（谷山）

コリア Korea

春先の食糧が不足する時期であることを考慮し、「ＫＯＲＥＡこどもキャンペーン」として食糧支援のため四月末に訪朝予定だったが、新型肺炎（ＳＡＲＳ）の影響により、中止となった。同時に、毎年東京で開催している「南北コリアと日本のともだち展」のピョンヤン展参加のため、日本から朝鮮学校の子どもたちを含め十六名が訪朝予定だったが、これも状況が好転するまで延期となった。（寺西）

《国内活動》

広報

東京事務所では毎年、中学生の修学旅行の訪問学習を一定数受け入れている。今年度も六月初旬現在で十七校の生徒さんが、北は仙台、西は岐阜から訪問。アフガニスタンは今どうなっているの？　一年間に何人の人を支援できるのか？　私たちにできることは何？　中学生はメモをとりながら熱心に質問をしてくれる。

（訪問学習受入ボランティア　目黒）

ＪＶＣ国際協力コンサート

年末開催のコンサートに向けて準備が始まった。この時期、まずは東京公演の合唱団員を募集する。そして企業へ協賛のお願いに回り、出演者の宿泊を無料提供してくれるホテルを探し、当日の運営を話し合い…と続く。今年は収益八百万円を目標に、コンサート実行委員の意気込みも高い。東京で十一月三十日に「メサイア」を、大阪で十二月六日「クリスマス・オラトリオ」を開催予定。

（ＪＶＣコンサート事務局 石川）

会員登場
～リレーエッセイ㉓～

わんぱくっ子が世界にはばたくように

＜愛知＞ 柴田 久寿子

二人目の子どもの出産を機に、夫の故郷である愛知県岡崎市で五年前から暮らし始めました。岡崎市は人口三十万の城下町で、自然が豊富で昔ながらの産業も残っている味わいのある街です。この街で子育てをしながら、NGOで得た経験を地域に還元したいと思い、「世界的規模で物事を考え、地域で問題解決のための実行力を持つ」人材育成の塾「わんぱく寺子屋」を始めました。

国際化されていく時代の中で、人や自然、物に感謝し、人の痛みがわかる人になってほしい。問題に直面した時に、解決していく力を身につけてほしい。環境や資源、平和がより大きな課題になる時代に、私には関係ないという生き方はできなくなるでしょう。そのような中で夢と勇気と知恵を持って、新しい時代を創る人材を育てたい、それが塾を開いた動機です。

プログラムは、自分の体より大きい百八十センチほどの板を使ってイスや机を手づくりしたり、指編みでマフラーをつくったり、森に行って基地を建てたり、交流パーティでは一メートルケーキをつくったり…、五感をめいっぱい使った内容になっています。

異文化体験の一環として民族衣装を着る「エスニック・ファッションショー」も行ないました。最初は恥ずかしがっていた子どもたちも一人が着だすと先を争って着たがり、ぶかぶかの衣装をひきずりながら舞台にたちました。父母の方もそれに触発されて挑戦してくれました。このような体験の中から人間関係を創りだし、思いやりが育てば、その感性のアンテナを世界中に広げられると思っています。

これらの活動が縁で、田畑を貸してくれる人が現れたり、他の市民運動の人とネットワークができたりしています。これからも、地球人として生きてほしいというメッセージを送りつづけようと思っています。

▶催し物でのひとこま
（エプロンを着用しているのが筆者）

国内ひろば
JVC NETWORK

故 西崎 憲司さんをしのぶ会

JVC創成期に活躍されたボランティアの二十三回忌法要が行なわれました。

小柄だけれども強い精神力、座禅姿、哲学的な言葉、自分の生き方をしっかりと持っていた。そんな三十歳のJVCボランティア西崎憲司さんが、タイ・カンボジア国境で強盗に遭遇し、亡くなられてから二十二年がたちました。毎年四月に開かれていた「しのぶ会」が、今年は、二十三回忌として（JVCとの共催で）四月二十六日に東京・神谷町の梅上山光明寺で行なわれました。

タイから一時帰国した方をはじめ、久しぶりのなつかしい顔、初めてお会いする方々、その後参加したスタッフなど、計二十三人が集まりました。法要の後の懇談会では、皆さんの当時の、現在の、明日の話を、たくさん伺うことができました。

二十三回忌を迎え、今後は「しのぶ」だけではなく、「ケン西崎」の名を冠した、新旧ボランティアの架け橋になる何かができたら、という声もありました。

西崎さん、当時学生だった私たちは、大人に見えたあなたの年をとうに越え、子どもはティーンエイジャーです。世紀が変わり、東西冷戦が終わっても、地球のどこかでの戦争は相変わらずです。あなただったら、どう思うのだろう？　どう生きているのだろうか？　皆さん、事あるごとに、そう思っています。その後、大きな事故もなく、JVCが活動を続けられるのも、あなたに護られているから…若いスタッフの言葉です。

（会員／連絡係　関田鶴子）

ボランティア紹介

五期目を数える東京事務所インターン制度。今年から「契約ボランティア制度」と名称が変わり、ますますパワフルに。

遠藤 卓志（えんどう たかし）
契約ボランティア・広報担当

学生時代より関心のあった国際支援に対する思いが日増しに強くなり、十数年間勤務した某大手ゼネコンを辞め、現在東京事務所で広報スタッフのお手伝いをしています。『いつの日か中東へ行くぞ!』と心に誓い、とりあえずアラビア語を勉強中です。日本語にはない発音と古代文字のような奇怪(?)な文字に苦戦していますが、とても楽しく今はまっています。

最後に…事務所にきたら気軽に声をかけてください。一番声をかけづらい風貌をしているのが私です。勇気ある人はぜひ!

大室 直子（おおむろ なおこ）
契約ボランティア・会員担当

東京に出てきて四年目。まさか自分が上野で働くなど想像もしませんでした。しかし、自分の将来をどのようにデザインしていくのかを考えるとき、JVCで聞けるたくさんの人生の経歴は、私にとって何よりも役に立っています。私は「たたかれて伸びる子」だと思っていますので、自分が知らない世界がまだまだあることへの危機感を原動力にして、一年間がっつり勉強したいと思っています。

望月 亜希子（もちづき あきこ）
契約ボランティア・調査研究担当

はじめまして、望月亜希子です。

大学院では森林開発とそれが与える影響について勉強しました。調査地であるインドネシアで、現地NGOの方々に協力していただいた時の経験からNGO活動に興味を持つようになりました。現在、JVCではODA改革や平和構築についての活動および勉強会に参加しています。

今後、約一年を通してODA改革・平和構築について学ぶことはもちろん、こうした活動がJVC内でどのように位置づけられ、またどのように社会に影響を与えていくのか考えていきたいと思っています。

梁田 直香（やなた なおか）
ホームページボランティア

専業主婦→パートタイマー→会社員…逆回しのライフコースでJVCにたどりつきました。個性あふれるスタッフに圧倒されつつ、「ふつー」の私ができる国際協力を探しています。まずは環境と健康と美容のため、六階の事務所へ階段で駆け上がる脚力をつけるのが小さな一歩…かな。ホームページを通じてみなさんにJVCの「今」をお届けしていきますので、よろしくお願いします!

募金をありがとうございます

JVCの活動は皆さまの募金で支えられています。

①JVC募金

JVCの各国での活動に役立てられます。
募金先をご指定いただくこともできます。
口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC東京事務所

4月計　3,669,058円

タイ	0円
カンボジア	0円
ラオス	942,800円
ベトナム	1,000円
エチオピア	2,000円
南アフリカ	170,000円
パレスチナ	13,000円
アフガニスタン	122,521円
北朝鮮	20,000円
無指定	1,354,361円
緊急：イラク	1,043,376円

②犬養道子「みどり一本」募金

この募金はJVC活動地での植林プロジェクトに使われます。
口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

4月計　445,388円　38名

③JVCサポート募金

4月計　117,200円　75名

お問い合わせ：岩間邦夫（iwamak@jca.apc.org）

<イベントレポート> イラク帰国報告会

五月八日(木) 東京

攻撃後のイラクで活動した看護師の吉野都が帰国し、五月八日（木）に東京都内で報告会を行ないました。会場には百名以上の方々が集まりました。

現地（バグダッド市内）の様子を撮影したビデオから、爆撃や略奪で破壊された街、路上に積み上げられたゴミ、被害の様子を語ってくれた街の人などの映像が流れました。痛々しい場面もありましたが、子どもたちの元気な様子も映し出され、救われる思いでした。

▲イラクの現状を報告する吉野（右）

そして、土ぼこりやガラスの破片が散らばる病院では地元の看護師と吉野が病院再開のために掃除に励むシーンがありました。「今が最悪なのだから、あとは良くなるだけ」という地元の看護師の言葉に胸が熱くなり、笑顔の中に凛としたたくましさを感じました。

新聞やテレビからはイラク関連の情報は減りつつありますが、本当に大変なのはこれからの復興期。遠く離れた日本から、しっかりとイラクの再建を見守っていきたいと思います。

（広報担当　石川 朋子）

（試行錯誤　トライアル・アンド・エラー）231号　発行日2003年6月20日　通巻231号　1982年8月16日　第三種郵便物認可

暮らしを彩る道具 63

LIFEWORK ITEMS

Viet Nam

手づくりの三輪車

竹と木でつくられたもの。素朴さの中に親の愛情がにじむ。

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係を作り出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

◎一般会員　10,000円
◎学生会員　5,000円
◎団体会員　30,000円
※それぞれに正会員と賛助会員があります。

ご入会は、次の口座へ郵便振替にて会費をご送金下さい。

口座番号：00150-3-48365
加入者名：JVC会員係

オリエンテーション(説明会)へどうぞ

JVCの活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。（無料・予約不要）

第1月曜日　午後7：00－8：30
第2・第4土曜日　午後2：00－3：30
※会場はJVC東京事務所です。

会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら（会員担当）へ。

ikuko-n@jca.apc.org

会員数【6月2日現在】　合計　1,641人
（正会員　554人　賛助会員　1,087人）

E-mail

jvc@jca.apc.org

JVCのホームページ

http://www1.jca.apc.org/jvc/

編集後記

長期ボランティア4名を迎え、このところにぎやかな東京事務所です。今年度は年齢も経歴も幅広いのが特色。性格的には…みなさん陽気で率直、早くもJVCにとけこんでいます。

JVCに集まる人々の血液型分布をみると、なぜか圧倒的にO型とB型が多く、次いでAB型、最も少ないのがA型。一般的に日本人にはA型が多いと言われていますが、JVCはちょっと違っているようです。ここは外国か!?（外国語が堪能なスタッフはたしかに多いけど…）（郁）

2003年6月20日発行（隔月20日）
発行人　熊岡 路矢
編集人　大野 和興・清水 俊弘
編集スタッフ　荻野 洋子・中山 郁子
レイアウト　細野 純也

発行　日本国際ボランティアセンター（JVC）
東京事務所
〒110-8605　東京都台東区東上野1-20-6 丸幸ビル6F
電話　03(3834)2388　FAX　03(3835)0519

印刷　ベスト・プリンティング
※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます
※本誌は再生紙を使用しています
定価500円